

口笛ディックのクリスマス・ストッキング

O. ヘンリー作 聴語順訳 タドン舞屋

たいへん注意しながら、
口笛ディックは、
元通りに戻した、
引き戸を、
有蓋貨車の。
と言つのも、
市条例第五七一六号は、
認めていたからだ、
(おそらく憲法違反だろうが)、
逮捕を、
容疑者の、
それに、
彼はよく知っていたから、
古くから、
この条例について。
だから、
貨車を降りる前に、
彼は、
見て調べた、
降りる場所を、
たいへん注意をくばって、
有能な將軍のような。
彼は見て分かった、

何も変わっていないと、
このまえ訪れた時と、
この施しの行為の好きな、
長期間じつと耐える都市を、
南部の、
冷たい冬の時期の楽園、
浮浪者たちの。
この土手は、
彼の貨車が停まっている、
吹き出ものができているようだった、
黒い小山で、
商売用の積み荷の。
あの微風が、
悪臭を載せて漂ってくる、
懐かしく思い出される
胸のむかつく臭いの、
古い防水シートの、
掛かっている、
俵や樽に。
黒ずんだ川の水が、
音高く流れていた、
船と船の間を、
ゴボゴボと油の音を立てて。
はるかシャルメットの方角に、
見えた、
大きく曲がるのが、

川の流れが、
ずらりと並んで、
列が、
電灯の。
川の向う岸に、
アルジェ地区が見えた、
長い不規則な汚点となって、
黒々と見えた、
夜明けが明るくしていくなかで、
東の空を、
向うの。
仕事熱心な曳き船が一・二艘、
求めてきた、
早起きの帆船を、
鳴らした、
二・三度のぎよつとする大きな汽笛を、
あるかのような、
合図で、
夜明けの。
三本マストのイタリア船が、
ゆっくりと近づいてくる、
船着き場に、
満載して、
朝一番の野菜や貝を。
くぐもった音が、
地底の捻りのような、

大きな荷馬車や路面電車からの、

聞こえはじめた、

かすかな震動をともなつて、

連絡船も、

船のメアリ・アンともいふべき、

やつと身ぶるいして、

とりかかろうとしていた、

朝の奉公人仕事に、

口笛ティックの赤毛の頭が、

その時、ひよいと引込んだ、

貨車の中に、

風姿が、

あまりにも堂々としている巨大な、

彼の眼前に、

割り込んできた、

その場面に、

ひとりの巨大で比類できない警官が、

角を回わつて、

山積みの米俵の、

立ちはだかつた、

二十ヤードたらずの所に、

貨車から、

日々訪れる奇跡が、

暁の、

繰り広げられて、

今またアルジェの上空に、

受けとつていた、

心奪われたようにその光景にみとれているのを、

この見本の人物から、

都市の警官の見事に輝いている、

彼は、

見詰めていた、

偏りのない品位をもつて、

かすかにあたりの色が濃くなつていくまで、

そのあと、

彼はそれらに広い背中を向け、

確信したかのように、

これは法の干渉は必要でないことだと

判断したのだろうか、

陽は登つてくると、

確かめずとも、

そして、顔を向け、

米俵のほうに、

取り出し、

平たい壇を、

内ポケットから、

それを唇にあて、

天を仰いだ、

口笛ティックは、

年季の入った浮浪者の、

間柄であつた、

なかば友達のような、

この警官と、

彼らは、

会つていた、

何度も、

今までに、

この土手の上で、

夜に、

警官は、

音楽好きの、

惹かれてやつてきたのだ、

吹き鳴らす妙なる口笛の調べに、

怠惰なこの放浪者の、

しかし、

彼は好きでなかつた、

このような状況で、

新しく始めることは、

交友関係を、

えらい大きな違いだ、

一人の警官に会つて、

淋しい波止場で、

口笛を吹き、

少し歌劇の曲で、

一緒に、

その警官と、

そして、

捕まってしまうのは、

警官に、

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

こつそり降りたところを、
貨車から。

そこで、ディックは待った、
ニューオーリンズの警官といえども移動する、

いつかは、
おそろく、それが自然の法則だ、
うん、ほどなく「ビッグ・フリッツ」は、

威厳をもって、
退場していった、

間へ、
列車の列の。

口笛ディックは、
待っていた、
自分で判断するのを、

それから、すばやく降り立った、
地面に。

見せ掛けながら、
可能な限りの態度を、
善良な労働者の、

探している、
その日の骨折リ仕事を、
彼は渡っていった、

網の目のようになっていた線路を、
つもりだった、
向ってゆく、

人通りの少ないジロー通りを抜けて、
予定しているベンチに、

ラファイエット広場にある、
そこへ行けば、約束のとおり、
彼は期待していた、

再会できると、
仲間と、
知られている、

名前で、
「スリック(滑り込み)」の。

冒険心旺盛なこの巡礼者は、
彼より早く行なっていたのだ、
一日分、

入ってしまったことを、
家畜貨車に、

その緩んだ薄板が誘惑した、
彼を。

口笛ディックは、
縫つように歩いているうちに、
まだ夜の闇がただよい、

大きな悪臭を放っているカビくさい倉庫の間を、
彼は、
その習性に従ってしまった、

由来となった、
呼ばれている仇名の。

控えめ乍ら澄んでいる、
それぞれの音程が、

正確で淀みない音色の口笛が、
一羽のコメクイドリ(米食鳥、ボボリンク)のようだった、

その口笛は鳴り響いていた、
暗く冷たい煉瓦の山々に、
雨のしずくのように、

降りそそぐ、
隠れ池に。

彼は、続けた、
簡単なメロディにして、

しかし、軽やかに変わっていった、
渦巻く本流に、
即興曲の。

誰でもその曲から、
選ひ出せるようだった、
トリルを、

山の中の溪流の、
スタックカートを、

緑の蘭草(いぐさ)の、
打ち震えている、
冷たい湖沼に生えて、

甲高いさえずりを、
眠そうなお鳥たちの。

ある街角を曲がった時、
口笛ディックは、
ぶつかりそつになつた、

小山に、
青色と真鍮ボタンの。

「ほほう」

感想を述べた、
小山が、
静かに。

「もう戻って来たのか。
霜がくるまでに、
二週間はあるぞうだ！
あんたは忘れたようだね、

口笛の吹き方を。
音程外れだった、
今の曲のおしまいの小節が」

「言っているのだね、
なんのことを？」

口笛ディックは言った、
自信なさそうな親しさで、

「どうせあんたのは、
例のドイツの楽団の慈悲深い曲だろ。
あんたに音楽がわかるのかね？
耳の穴をほじって、
もっぺん聞いてみな。
これは、やった通りだ、
いま口笛で、
いいかい？」

唇をすぼませたディックを、
大男の警官が手をあげて制した。

「まあ、待て！
彼は言った。

「分かりなさい、
正しいやり方を。
分かりなさい、
これも、
宿無し（ローリングストーン）は、
口笛なんぞ吹かないと」

ビッグ・ブリッツの重たい口ヒゲが、
丸い輪を描き、
その奥の方から、届いてきた、

音色が、
深みのある柔らかな、
そのような、
フルートからの。

彼は、繰り返して吹いた、
二・三小節を、
曲を、
その浮浪者が口笛で吹いていた。

その演奏は、
よそよそしかった、
しかし、正確だった、
彼はとくに強調した、
音符について、
異議を唱えた。

「このBはBナチュラルだ、
Bフラットではない。
ところで、

おまえは喜んでいいよ、
わたしがお前と、
ここで会ったことを。
一時間後だったらな、
わたしはお前を、
むりやり籠に入れて、
口笛を吹かせることになったんだ、
小鳥のように。

命令はなあ、
捕まえることだ、
浮浪者を全部だ、
日が昇ったら」
「どこへいくんだって？」

「引っ張っていくんだ、
浮浪者を——
全員をだ、
実際の財産の無い者たち。
三十日間の無報酬労働だ、
いやなら、十五ドル払うこと」

「真正直な話だね、
それとも、冗談かい、
私への？」
「最高の知恵付けた、

あんたが聞いたうちで、
教えてやったんだ、

わたしは思うから、

あんたが悪い男でないと、
ほかの連中ほど、

それに、

口笛が吹けるから、
『魔弾の射手』を、

上手に、

私がやるより、

出くわすなよ、警官たちに、

そこらの角で、

出ていきな、

町から、

一・三日間、

じゃ、グッドバイ

それで母のように慈悲深いニユーオーリーンスも、

とうとう愛想をつかしたのか、

奇妙な皺だらけの雛鳥に、

年々からだを摺り寄せてくる、

恵み深いマダム翼の下に、

大男の警官が立ち去ってからも、

口笛ティックは立ち尽くしていた、

決心がつかない時間を、

感じていた、

突拍子もない憤慨を、

家賃不払いの借家人の、

命令された、

明け渡すよう、

借家を、

彼が心に思い描いてきたのは、

一日だった、

夢見心地の、

彼が再会し、

友人と、

一日だった、

ぶらぶらと過ぐす、

波止場を、

頬ほり、

バナナやココナツを、

散乱した、

船から下ろす時に、

フルーツ船から、

それから、ご馳走を食べ、

無料の昼食支給所のカウンターで、

受け取って、

人達から、

ゆったりとした、

店の持ち主の、

人がよすぎるのか、

気前がよすぎるのか、

呑気すぎるのか、

追いたてることもしない、

彼を、

そのあと、

一服して、

一つの小さな沢山の花が咲いている公園で、

そして、

ひと眠りした、

日陰になっている一角で、

波止場の、

しかし、やってきたのは、

厳しい命令だった、

追放の、

それは、彼はよく知っていた、

服従しなければならぬと、

それで、用心深い目をした、

輝きがないかを探る、

真鍮のボタンの、

彼は退却を始めた、

田園の避難所を目指して、

一・三日のあいだ、

田舎にすることが、

必ずしも証明にはならない、

たいへん惨めであるという、

可能性のほかには、

身を切る寒さの、

霜の、

無い、

忍まわしい害悪は、

思いつく、

とは言っても、沈んだ気持だった、

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

口笛ティックが通ったとき、
古いフランス人の市場の、
えらんだ道筋にある、
川ぞいの。

身の安全を期して、
彼はまだ印象を与えていた、
世間に、
彼の人物を、
関係者と、
善良な職人と、
仕事場に向かっている。

店主が、
市場にいた、
欺かれずに、
声をかけてきた、
彼に、
一般的な名前で、
同類の、
それで、
そのジャックは立ち止まった、
驚いて。

その売り手は、
感情がやわらいで、
照明されたので、
彼自身の明晰さを、
贈与してくれた、
一本と、

フランクフルト・ソーセージ、
半分を、
パンのかたまりの、
これで、問題は、
朝食の、
解消した。

地形上の理由から、
それが始めたので、
川の堤防から、
追放の身の男は、
登った、
上に、
土手の、
よく踏みかためられた上の道を、
歩きだした。

郊外の人々の目は、
みた、
彼を、
冷たく疑いながら、
誰も彼も、
反映していた、
険しい意思を、
市の冷酷な命令の。

彼は恋しく思い出していた、
やすらかな暮らしを、
人が多い街の、

安全を、
彼がいつも見出すことができた、
人ごみのなかで、
シャルメットで、
六マイルほど歩いて着いた、
ぶらぶら歩きやり方で、
そこで、
突然、
慌てさせたのが、
彼を、
広大で営々と働いている工事場だった。

新しい港が造られている。
岸壁が築かれ、
圧縮機が動き、
つるはしやシャベルや手押し車が、
ぶつかってきた、
彼に、
へびのように、
四方八方から、
横柄そうな現場監督が、
とんできた、
彼のところへ、
力を推定した、
彼の筋肉の、
目つきで、
初年兵募集下士官の。

初年兵募集下士官の。

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

褐色の肌の者も、黒い肌の者も、彼の周りのみんなが、骨折って働いていた。

彼は逃げ出した、
恐怖を感じて。

彼は到着した、
昼に、

田園地帯に、
大農園のある、

広大な、
色のくすんだ、

無音の土地で、
縁どられている、

大河によって。

彼は見渡した、

畑を、

砂糖黍の、
たいへん広大な、

その最も遠い境界は、
溶けあつて見えた、

空と。

砂糖づくりの季節は、

たけなわで、

刈り取り機が何台も、
働いていた。

荷馬車が、

きしる音を立てて、
もの悲しく、
あとを追っていた。

黒人の御者たちが、
せき立てていた、

ラバを、

スピードを上げるように、
陽気な響きわたる呪いの言葉で。

緑の木立が、

霞がかかって、

薄い水色の、
距離がある、

示していた、

農園で働く人々の住居があることを。

高い煙突は、

製糖工場の、
捕らえた、

目を、
何マイルも遠くで、

燈台のように、

海の。

しばらく行ったところで、

口笛ディックの鋭敏な鼻が、
かぎつけた、
匂いを、

魚を揚げている。

ポインターのように、

下りた、
鵜を追う、

まっすぐに、

土手の横手を、
小屋へ、
人を疑わない昔からやっている漁師の、

じいさんを、
彼は魅了した、

歌やお話で、
それで、

彼はご馳走に有り付いた、
海軍将官の、

そして、哲学者のように、
打ち負かした、

最悪の三時間を、
その日の、

昼寝で、
木の下の、

目をさまして、

再び彼はこの逃避(ヘライジャ)を続けた時は、
霜が降りる前の張りつめた輝きが、

空中の、
そのあとにきた、

眠気のある日中の暖かさの、
この兆候が、

冷たい空気の夜の、

変換した、

頭脳に、

遍歴王子どのの。

彼は長くした、

歩幅を、

考え始めた、

避難所について。

彼は歩き進んだ、

道を、

それは忠実に従っていた、

湾曲に、

土手の、

元の大地に沿っているのだが、
どこまで続くのか彼にもわからなかった。

灌木とおびただしい雑草が、

生い茂っていた、

馬車の轍の跡にまで。

この場所を過ぎると、

鬱陶しいものが、

低地の、

群がって追いかけてくる、

ワーンと鳴っている、

鋭い悪意に満ちたソプラノで。

夜の濃さが増してくると、

寒さも増しているが、

甲高い音が、

蚊の、

なってきた、

食い意地のはった、

怒りっぽい、

唸り声に、

それは掻き消していた、

他の一切の音を。

右手を見れば、

夕の空の前に接して、

彼は見た、

一つの緑の燈火が揺れ、

その明かりと一緒に、

蒸気船のマストや煙突が、

大きな、

港に入ってくる船の、

動いていく、

スクリーン上で、

幻灯機のシヨウの。

薄気味の悪い沼地があった、

左手には、

そこからは、

聞こえてきた、

奇妙な水の流れのような鳴き声や、

押しつぶされた捻り声が。

この口笛を吹く放浪者は、

曲を口笛で演奏しはじめた、

陽気にさえするうちに、

すっかり消し飛ばしたくなった、

このように悲しく影響してくるのを、

以前には無かったことだった、

牧羊神がすごく楽しく吹いたそのあとには、

あの葦笛を、

このような音色は聞かれなかった、

このような滅入るほど淋しい地方では。

ある遠くのがチャガチャと鳴る音が、

背後でしていた、

急速に、

大きくなってきた、

速い打つ音となって、

馬の蹄の、

だから、口笛ティックは、

脇へ踏み下がった、

露で濡れている草むらに、

明けるために、

道を。

振り向くと、

彼は見た、

近づいてくるのを、

見事な二頭の格好のいい葦毛の馬が、

曳いている、

四輪馬車を。

頑丈な男が、

白い口髭の、

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

腰かけた、
前の座席に、
すっかり気を使っている、
張りつめた綱に、
彼の手の中の。

彼の後ろに、
座っていた、

落ち着いた感じの中年婦人と利発そうな少女が、

まだ達していない、
若い婦人というには。

ひざ掛けが、

すべり落ちかけた、

膝から、

紳士の、

馬を御している、

口笛「ディックは見た、

二個の丈夫な布の袋を、

彼の両足の間に、

袋である、

あの、

町々を渡り歩いているときに、

彼は見ていた、

用心深く手渡しされているのを、

急行荷馬車と銀行のドアの間で。

ほかの空いているところには、

馬車の、

いっぱい詰まっていた、

包みが、
いろいろなサイズと形の。

四輪馬車が一気に通り去るとき、
横を、

道を開けた浮浪者の、

輝いた目をした少女が、

急にその気になって、

なにか楽しい向こう見ずな衝動で、

のり出して、

彼の方に、

かわいい眩しいほどの笑顔で、

叫んだ、

「メーリークリスマス！」と、

甲高い訴えるような高音で。

このようなことは、

かつて、

しばしば、

起こったことはない、

口笛「ディックに、

それで、

彼は戸惑ってしまった、

思いつくのに、

適切な返答を。

しかし時間はない、

考えている、

彼は直感が決めるのにまかせた、

ひっ掴み、

彼の壊れかけた山高帽を、
彼は急いでそれを手を伸ばして掲げて、
振るった、
続けて、

そして大声で叫んだ、

礼儀を示しながら、

「アー、ゼア！」と、

飛んでいくような馬車をめがけて。

急な動きが、

その少女の、

もたらした、

一つが、

包の、

包みが解けて、

何かが、

しなやかな黒いものの、

落ちた、

そこから、

道に。

浮浪者は、

それを拾い上げて、

分かった、

新しい黒の絹の片方のストックキングと、

長い、

きれいで、

すらりとしている。

掴むとバリバリと音がした、

しかし、
素晴らしい柔らかさだった、
彼の指のあいだで。

「ほんとに花ざかりのいたずらっ子、
嬢ちゃんだ！」

口笛「ディックはつぶやいた、
広い笑い顔をして、
二つに分けるほどの、
彼のそばかすだらけの顔を。

「これは、
これは、
驚いたことだ！
メーリークリスマス！
とはな。

まるでカッコー鳥の時計の声みたいだった。
あの子が言ってくれたんだ。
あの人たちは、
きつと、
金持ちだ、
違うない。

積み重ねていた、
麻袋を、
カネの、
彼の足元に、
平気で、

まるで干しリンゴみてえに、
クリスマスの買い物に行ってきたんだろうが、

なくしちまったわけだな、
サンタクロース用の新しい靴下の片っぼを。
ほんとに花ざかりのいたずらっ子、
嬢ちゃんだ！

なんてったって「メーリークリスマス」だもんな！
いやはや驚いたのなんの！
「あら、
ジャック、
ご機嫌いかが？」って調子でな、
五番街みてえにお上品かと思やあ、
気まぐれなんだ、
お祭り騒ぎみてえに、
シンシナチの「

口笛「ディックは、
豊んだ、
そのストッキングを、
注意深く、
押し込んだ、
彼のポケットに。

ほとんど二時間ほどたっていた、
彼が来たのは、
徴候と思われるところに、
住まいの、
いくつもの建物が、
大きく広がる農園の、
目に入り始めた、
ある角を曲がったところで、

たやすく見つけることができた、
その農園主の住居を、
大きな四角い建物の、
二つの棟が張り出していて、
たくさん数の大きな明かりの灯った窓があり、
広いベランダが取り巻いている、
すっかり長く周りを、
建っていて、
なめらかな芝生の庭に、
かすかに照らされている、
ずっと漏れてくる光で、
ランプから、
屋内にある、
見事な木立が家を囲み、
古風な感じの低木の植え込みが、
みっしりと、
小道や塀の際に、
地域と、
使用人たちの、
製粉工場の建物は、
位置していた、
距離をおいて、
その裏に。

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

道は、
そして、
取り囲まれるようになり、

両側を、
垣根で、
いま、

口笛ティックは近づいていた、
その家に、
彼は急に立ちどまり、
においを嗅いだ、
あたりの。

「季節労働者用のシチューを煮ているので

ないとしたら、
どこかで、
このすぐ近くで、

彼はひとりごとを言った、

「おれの鼻も、
本当のことを
伝えられなくなったことになる、

躊躇することなく、
その垣根によじ登り、
風上に向かった。

彼は出た、
一見して使われていない空地に、
積み重ねが、

古い煉瓦の、
山になっていた、
廃棄され、
腐敗した木材も、

その一角に、
彼は見た、
かすかな赤い光を、
焚き火の、

ほとんど無くなりそうな、
石炭の残り火が、
彼は思った、

見えると、
うすぼんやりした人影が、
座ったり横になっっている、
その周りで。

さらに近く寄ると、
光で、

小さな炎の、
急に燃えあがった、
彼は見た、
はつきりと、
太った姿を、

ぼろを着た男の、
古い茶色のセーターを着て、
縁なし帽をかぶっている。
「あの男は」

口笛ティックは呟いた、
そっと、

「瓜二つだ、
ポストン・ハリーに。
試してみよう、
彼に送って、
いい信号を」

彼は、
口笛を吹いた、
一・二小節を、

ラグタイムの旋律を、
その旋律はすぐに応じられた、
そして早くも終わってしまった、
独特の音楽の装飾楽句となって。

最初に口笛を吹いた男は、
歩み寄った、
自信をもって、
焚き火に。

太った男も顔をあげ、
大声で言った、
喘息病みのゼーゼー声で。

「諸君、
ここに予期していなかった、
歓迎する追加の人が、
わがサークルへの、

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

それはミスター・口笛ティックである。

古くからの友人で、

私の、

この人のことは、

私が全面的に保証する。

給仕係は、

用意してくれ、

もう一人分の食器を、

すぐに。

ミスター・W・D、

参加してください、

夕食に、

その夕食会で、

この人は、

説明してください、

我々に、

境遇を、

与えてくれた、

喜びを、

彼が仲間に加わる」

「選り出した言葉だな、

詰め込んだものから、

辞書の中に、

いつものように、

ボストンよ

口笛ティックは言った、

「しかし、

有難う、

にも拘らず、

ご招待いただいて、

私は推測する、

私はここに来た、

同じやりかたで、

皆さんがたがそうしたので、

一人の警官が与えてくれた、

私に、

情報を、

今朝のことだ。

皆さんは、

働いているのか、

この農園で？」

「客人というものはな」

ボストンは言った、

厳しく。

「失礼な言動をとってはならない、

接待する人に対して、

彼が一杯食べるまでは、

食物を。

いまのは、

ないな、

礼儀を知っているやり方では、

働いているのかだと！

だが、

わたしは抑えよう、

わたし自身を。

俺たち五人、

わたし、

つんぼのピート、

まばたき、

ぎよる目、

それとインディアナ・トムだ。

平然としていたんだ、

あの企画に、

ニューオーリンズ市の、

働かせようとする、

やってきた紳士たちを、

市の汚い街で。

だから俺たちは、

旅に出ることにしたんだ、

夕べにな、

ちようどその頃だ、

ゆうべの、

優しい色合いが、

夕暮れの、

投げおちたころ、

ひな菊やもろもろに。

まばたき、

渡してくれ、

空っぽのカキの缶詰を、

あなたの左にある、

その空腹の紳士に、

あなたの右にいる」

それから十分間は、

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

一団は、
浮浪者の、
全神経を集中した、
夕食をとることだけに。

古い五ガロンの灯油罐の中で、
彼らは調理していた、
煮込み料理を、
ポテト、肉、玉ねぎの、
それらを彼らは食べた、
小さな缶から、
彼らが見つけた、
散らばっているのを、
空き地に。

口笛ディックは、
知っていた、
ボストン・ハリーを、
以前から、
分かっていた、
彼を、
一人であると、
もっとも抜け目のない、
首尾よくやっている、
彼が仲間うちで。

繁盛している家畜販売業者が手堅い商人のよう
に、
見えた、
彼は、

田舎の村の出身の、
彼は頑丈で強健で、
血色のいい、
いつも剃りあげた顔だった。

彼の服は丈夫で小ざつぱりしていて、
彼は特に手入れをしていた、
上等そうな靴に。

この十年間に、
彼は獲得した、
評判を、
行なつたと、
たいへんな数の、
うまくやり遂げた詐欺を、
彼の知り合いの誰よりも、
そして、
彼はやったことがなかった、
日中の労働仕事を、
役に立たない、
彼の。

噂は流れていた、
彼の仲間たちの間で、
彼は蓄えていると、
たいへんな金額の金を。

4人のほかの男たちは、
いい見本だった、
人目を避けて歩く、

ぶざまで、
不快な種族で、
身につけて歩く、
レットルを、
胡散臭いの。

底まで、
大きな缶の、
こそぎ取ったあと、
パイプに火をつけ、
石炭の火で、
二人が、
男たちの、
呼んだ、
ボストンを脇に、

話した、
彼と、
小声で、
隠しごとを話すように。
彼はうなずいた、
大きく、
それから、
大きな声で言った、
口笛ディックに。

「あんな、
聞いてくれ、
若い人、

分かりやすい色んな話だ。
俺たち五人はある計画を立てている。

私は保証したところだ、

あんたも、

公平に扱われる。

あんたも加わっている、

利益は同じに、

他の連中と。

だから、

協力してくれ。

二百人の使用人に、

この農園の、

支払われることになっている、

一週間分の賃金を、

明日の朝に。

あしたはクリスマスだ。

みな望んでいる、

休暇をもらうことを。

農園主は言っている。

「働きなさい、

五時から九時まで、

朝の、

出荷してくれ、

貨車一両の砂糖を、

わたしは支払う、

それぞれの人に、

現金で、

その場で、

一週間分に、

特別に一日分を加えて。」

みんなは答えた、

「フレー！旦那さん、

大賛成です！」

農園主は、

馬車でニューオーリンズへ、

今日行って、

持って帰ってきた、

現金を。

二千七百四十五ドルが、

その金額だ。

わたしは聞いた、

男から、

よくしゃべる、

彼は入手した、

帳簿係りから。

主人は、

この農園の、

思っている、

彼は払うと、

この富を、

使用人たちに。

彼は間違えて考えているね。

彼は支払うんだね、

金を、

俺たちに。

これは、

モノになるんだ、

有閑階級の。

元々、

その人たちのモノだったんだ。

それで、

半分は、

この収穫物の、

私のものだ。

残りの半分は、

お前さんたちが分けなければいい。

どうして、

違いが生ずるかって？

わたしは頭脳を持っている。

私が計画したんだ。

これがやり方だ、

頂こうとしている、

それを。

いま何人かの客が来ている、

夕食への、

この屋敷には、

だが、

客は帰る、

九時ごろには。

客は来たんだ、

一時間ほど前に。

もし、

彼らが帰らなくても、

すぐに、

俺たちは進める、

計画を、

予定通り、

とにかく、

俺たちは必要だ、

一晩が、

持って立ち去るには、

金を。

あれは重いからな。

だいたい九時にな、

つんぼのピートとプリンキーは、

居るようにする、

道路に、

四分の一マイルのところに、

家の向こうの、

そして、

火を点ける、

でかいサトウキビ畑に、

その、

まだ。

刈取り機が刈りはじめていない、

風はちよūdい具合だ、

轟音を立てはじめるのに、

2分ほどで、

警報器が鳴りはじめる、

作業の男たちが、

このあたりの、

やってくる、

そこに、

十分もすれば、

消火に取り掛かる。

それには、

放っておかれる、

金の入った大袋は、

そして、

女たちだけだ、

家の中は、

俺たちが対応するのは。

あんたは聞いたことがあるか、

砂糖キビが燃えるのを？

そりゃ、

女たちは居ないぜ、

叫ぶことのできる、

大声で、

聞こえるような、

あれがパリパリと鳴る音を上回る。

だから仕事は全く安全にすむ。

ただ一つの危険は、

捕まってしまうことだ、

俺たちがずっと遠くに逃げるより前に、

金を持って、

そこで、

みんなは—

「なあ、

ボストン」

さえぎった、

□笛ティックは、

立ち上がりながら、

「有難う、

食事を、

みんながくれた、

私に、

だが、

わたしは行くぜ、

もう」

「なんだと？」

言った、

ボストンも、

立ち上がりながら、

「だからよ、

外してくれないか、

おれを、

この話から、

分かってくれ、

わたしは浮浪者生活をしている、

これでいい、

だが、

ほかのことは、

わたしには合わない。

泥棒はよくない。

わたしは、

グッドナイトを言うよ、

いろいろとアリガト—

□笛ティックが二・三歩ほど歩き始めた、

そついいながら、

だが、

彼は歩みを止めた、

突然に、

ボストンが銃を構えた、

彼に、

短いボルバーで、

大きい口径の。

「坐りな」

浮浪者の頭目が言った。

「おれは、

大きく誇りを失うだろう、

自分について、

もし俺がお前を行かせて、

台なしにしたら、

この企てを。

あんたは、

離れないで居ろ、

この小屋を、

俺たちが終わらせるまで、

仕事を。

終わりから、

この煉瓦の山の、

あんたは行ってはいけない。

二インチでも、

あれを超えたら、

おれは撃つからな。

気楽にいたほうが、

いいよ、

今は「

それは、

おれがいつもやっていることだ」

口笛ティックは言った、

「楽に行くのはな。

あんたは、

下げたほうがいい、

銃口を、

その十二インチの、

戻しなさい、

元のところに。

おれは、

ここに残る、

新聞がよく言うように、

「諸君の中に」と

「ようし」

ボストンが言った、

下げながら、

銃を。

ほかの連中も戻ってきたので、

彼はまた腰をおろした、

突き出ている厚板に、

材木の山から。

「出ていこうと思つたな。

言っておく。

わたしは今度のチャンスを見逃さない、

たとえ、

わたしが撃たなければならなくても、

古くからの知り合いを、

これを成功させるために。

私は望まない、

傷つけることは、

誰かを、

特別に、

ただ、

この何千ドルは、

わたしが頂こうとしている、

わたしをいい方向に向かわせるだろう。

私はこの道をやめて、

始めるのだ、

酒場でも、

小さな町で、

知っている。

私は飽きてしまった、

放っておかれることに」

ボストン・ハリーは取り出した、

彼のポケットから安物の銀の時計を、

かざして見た、

焚火の火に。

「十五分前だ、

九時の」

彼は言った、

「ピート、

おまえとまばたきは、

始めなさい。
道路に出て、
母屋の前をすぎて、
火をつけるのだ、
サトウキビに、
十二箇所ほどの場所の、
そして、
向かえ、
堤防に、
帰ってくるんだ、
堤防を、
道路でなく、
あなた達が会わないように、
誰かに。
その時までには、
帰ってくる、
あの連中は出払っているだろう、
火事場に向かつて、
そこで、
我々は押し入って、
母屋に、
つかみ取るんだ、
金を。
みんな、
差し出せ、
持つてるマッチをすべて」
二人のぶつきらぼうな浮浪者が、
集めはじめた、
すべてのマッチを、

その場の、
口笛ティックも寄付した、
彼の割り当て分を、
きげんよく、
ときばきと。
そして、
彼らは、
出かけて行った、
うっすらとした星明りの中を、
方角へ、
その道路の。
三人の残りの放浪者のうち、
二人は、
ぎよろ目とインディアナ・トム、
寄りかかった、
だらしなく、
都合のいい材木に、
注意を払って見ていた、
口笛ティックを、
隠すことなく、
嫌悪感を。
ボストンは、
観察しながら、
反対意見を持っていた新入りが、
気持ちになったのを、
居残る、
平穩に、

緩めた、
少し、
警戒心を。
口笛ティックは立って、
すぐに、
歩き始めた、
ゆっくりと、
行き来して、
保つようにした、
注意深く、
範囲内にいるよう、
領域の、
指定された、
彼に。
「その農園主のことだが、」
彼は言った、
足を停めて、
ボストン・ハリイの前で、
「どうして、
あなたはそう思うのだ、
彼が持つてると、
金を、
家の中に、
彼が？」
「おれは考えたんだよ、実際に、

この場合の、

ボストンは言った、

「彼は行った、

ニューオーリンズへ、

金をとってきた、

うん、

今日のことだ。

変えたくないかい、

気持ちを、

これで、

加わらないか？」

「いやいや、

聞いてみただけだ。

どんな種類の馬で出かけたんだ、

その農園主がドライブして？」

「葦毛の二頭立てだ

「四輪馬車だったか？」

「ああ

「女の人も一緒だったか？」

「女房と子供だった、

おい、

どこかの朝刊のために、

試みているのか、

聞き出そうと、

「ニユースを？」

「おれは会話しているだけだ、

時間を過ごそうとして、

おれは推定している、

その馬車が追い越していったと、

わたしを、

道で、

今日の夕方に、

それだけだ」

□笛ディックは、

両手をポケットに突っこんで、

続けた、

途中でやめた行ったり来たりを、

焚火のよこの。

彼の指先が、

触れた、

あの絹のストッキングに、

彼が拾った、

道で。

「ほんとに花ざかりのいたずらっ子、嬢ちゃんだ！」

彼は呟いた、

ニコツと笑いながら。

彼が歩いて行ったり来たりしているとき、

彼には見えていた、

自然の隙間をとおってか、

小道をとおってか、

木の間に、

農園主の住居が七十五ヤードほどの距離で。

側面の、

その家の、

彼に向いている、

表わしていた、

大きな、

たくさん明かりが灯る窓を、

それを通して、

柔らかな光線が漏れていた、

照らしている、

広いベランダと、

ある範囲を、

芝生の、

下にある。

「何とあなたは言った？」

ボストンが言った、

鋭く。

「おお、

何でもない」

□笛ディックは言った、

ぶらぶら歩きをし、

気にかけないで、

蹴とばしたりしていた、

もの思いしながら、
小石を、
足元の。

程度に、
その年代と郷愁を感じさせる、
目立つことより、

二つの国の。
作法にも会話にも、
あった、

「安楽で、」
続けた、

興味深い名前がいくつも、
署名されていた、

あのもっとも難しい種類の裕福さが、
あの種類の、
依然として維持している厳格な作法の。

さえずるように歌う放浪者は、
そっと呟っていた、

コーナーには、
絵画の、

農園主自身は、
あるようだった、
ダイナモ(発電機)で、
発生している、
大部分を、
陽気さと才知あることの。

「愛想がよく、
上品で、

馳走は、

若い招待客たちは、
会合への、
分かっていた、
大いに困難なことが、
応答することの、
彼にたいして、
弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

色気があつて、
「メーリー・クリスマース」と、
驚いたなあ

種類のものだった、
輝きをもたらせる、
目に、
美食家たちの。

事実、
この青年たちは、
試みている、
攻め込もうと、
彼の試みに、
繰り返し、

晩さん会が、
二時間遅れて、

給仕のしかたは、
早く、
無言で、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

開催されていた、

給仕のしかたは、
早く、
無言で、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

ベルミード農園ダイニングルームで。

給仕のしかたは、
早く、
無言で、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

食堂も、

惜しげなく与えられ、
同様に、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

そこにある総ての付属物も、
物語っていた、
旧制度を、

給仕人たちが資産の一部であると、
食器とおなじように、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

それが明らかに、

給仕人たちが資産の一部であると、
食器とおなじように、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

ここでは連綿と続いてきた、
提示しているというより、
記憶によって。

名前は、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

記憶によって。

それで農園主の家族と招待客が言い現わしている、
互いに、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

食器類は、

歴史上でも知られているものだった、
年代記に登場している、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

豊かだった、

歴史上でも知られているものだった、
年代記に登場している、

弾丸を、
冷やかしゃ冗談の。

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

刺激されて、

望みに、

得ようとす、

賞賛を、

彼らの儀礼的に一緒に行動する仲間の。

しかし、

たとえ彼らが繰り出しても、

狙いをつけた一言を、

農園主は彼らに負けを感じさせるようにする、

ものすごく多くの狼狽させる激しい雷で、

笑い声の、

彼が言い返すのに伴わせている。

食卓の上座には、

静かで落ち着いた品のある慈悲深い、

君臨していた、

女主人が、

そして向けていた、

ここかしこに、

ちよつと良い笑顔と適切な言葉と勇氣づける目線を。

会話は、

集会の、

取り留めもなく

続くこともなく消えてゆくものだった、

が、

やがて、

会話は主題にしていた、

浮浪者問題を、

その問題、

最近悩ませている大農園を、

広くあたり一帯の、

農園主は、

掴んだ、

この機会を、

向けることに、

ひとなつこい繰りだしを、

からかいの、

女主人に、

責めながら、

彼女を、

奨励していると、

大量発生を。

「彼らは、

群れをなして動き回る、

うろついて、

この川を、

毎冬に」

彼は言った、

「彼らは荒廃させる、

ニューオーリンズを、

わしらは捕まえる、

はみ出た連中を、

彼らは大抵もつとも悪い、

それで、

一日か二日前だが、

ニューオーリンズ夫人が、

突然、

気が付いた、

彼女は買い物に行けないと、

かすって通ることなしには、

彼女のスカートが触れることなしには、

たいへんな列に、

浮浪者たちの、

日向ぼっこをしている、

歩道で、

それで言った、

警察に。

「捕まえてください、

彼らをみんな」

それで、

警察は捕まえた、

一ダースか、二ダース、

そして残りの三千人から四千人が溢れている、

うろつき回って、

堤防で、

そこで、

夫人は、

「その——」

向けて、

悲劇的な身振りで、

肉切りナイフを、

彼女に——

「餌をやっている、

彼らに。

彼らは働かない。

彼らは無視する、

わたしの監督者たちを、

そして、

彼らは友達になる、

わたしの犬たちと。

そして、

お前さん、

マダム、

餌をやっている、

彼らに、

わたしの目の前で、

そして、

脅かす、

わたしを、

わたしが口出しすると。

聞きたいのは、

ね、

いったい何人を、

今日、

あなたは扇動したのですか、

これからの怠け癖と略奪行為のために？」

「六人だと思つ」

夫人は言った、

思慮深い微笑を浮かべて、

「しかし、

あのね、

二人は、

彼らのうちの、

申し出ていた、

働きたいと、

あなたはそれを聞いていましたよ」

農園主の当惑している笑いが鳴り響いた、

再び、

「そうだな、

彼ら自身の職業でね、

一人は造花作りで、

もう一人はガラス吹き工だった、

うん、

彼らは求めていた、

仕事を！

少しも彼らは同意しないだろう、

ほかの仕事で労をとることに」

「ほかの一人は」

つつけた、

思いやりのある女主人は、

「使っていた、

たいへん良い言葉を。

あれは実際に並はずれたことです、

あの境遇の人には、

彼は持っていた、

時計を。

そして、

住んでいた、

ボストンに、

わたしは信じます、

あの人たちがみんなが悪人ではないと。

彼らはいつも思えます、

わたしには、

むしろ発育が遅れているのだと。

私はいつも子供たちだと思ってきました、

彼らは知恵がとどまってしまった、

停止状態に、

一方で、

髭だけは続けている、

伸びるのを。

私たちは、

通り過ぎた、

一人を、

この夕方、

馬車に乗って帰ってくるときに、

顔をしていた、

同然の、

無能力と。

彼は口笛を吹いていた、

間奏曲を、

「カヴァレリア」の、

更に吹いていたのです、

精神まで、

作曲したマスカーニその人の、

それに入れて」

目を輝かせた少女が、

坐っていた、

左に、
女主人の、
身をのり出した、
言った、
内緒ごとを打ち明ける低い調子で。

「ぶっしてるでしようね、
お母さま、
あの浮浪者が、
私たちが追いついた、
道で、

見つけた、
私のストッキングを、
思いますか、
彼は吊るすと、
今夜？
それで、

私は吊るせない、
一つしか、
知っていますか、
なぜ、
私が欲しがったか、
新しい一足を、

シルク・ストッキングスの、
私はたくさん持っているの？
ええ、
ジュディおばさまが言いました、
もしあなたが吊るせば、
両方を、
少しも使われていない、

サンタクロースは、
一杯にする、
片方を、
とてもいい物で、
そして、

ムッシュー・パンプが入れてくれるんですって？
ほかの支払いを、
すべての言葉について、
その人が口にした、
いい言葉も、
悪い言葉についても？

クリスマス・イヴに、
それが理由です、
私が、
いつものようではなく、
優しく丁寧に行っているのは、
誰にでも、
今日は、
ムッシュー・パンプは、
知っているでしょう、
紳士の魔法使いなのよ、
彼は—

その言葉は、
少女の、
中断させられた、
驚くべきものによって、
亡霊のようなものが、
ある燃えつきた流星の、

黒い筋状のものが、
飛び込んできて、
破って、
ガラス窓を、

テーブルの上に乗った、
それは粉みじんに砕いた、
破片にした、
何十個ものクリスタルガラスや陶磁器を、
それから、

きらりと光りながら、
鼻先のあいだを、
顧客の、
壁に、
痕跡をのこし、
そこに、
深い、
丸みのある凹みを、
それには、
今でも、
訪問客は、
ベルミードへの、
驚嘆する、
その人が見て、
それを、
聞いて、
この話を、
伝えられている。

女たちは悲鳴を上げた、
いろいろな音程を発して、

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

男たちは跳び上がった、

そして、

置いた、

その手を、

彼らの刀剣に、

この表現が間違いない表現であることを願うが、

時代考証の観点からも認められる。

農園主が最初の人だった、

行動することの。

彼は飛びついた、

この侵入してきた飛び道具に、

手に取って、

皆に見せた。

「すごいことだ！

(ジュピターは、ローマ神界の主神(惑星では木星)」

彼は叫んだ、

「流星シャワーだ、

靴下の！

交信がついに確立されたのか、

火星との？」

「言つとすれば、うふん！ 金星です」

勇気を出して言った、

青年紳士客が、

見ながら、

望んで、

推奨を、

反応のない若い女性の訪問客に向けて。

農園主は掲げた、

手を一杯に伸ばして、

この不作法極まる訪問物を、

長く下がった黒いストッキングを、

「装填してあるよ」

彼は発表した。

彼はそう言って、

彼は裏かえした、

そのストッキングを、

掲げながら、

それを、

つま先を持って、

そして、

落下してきた、

それから、

丸みを帯びた石が、

ざつと包まれている、

一枚で、

黄色がかった紙で。

「さあ、

最初の惑星間の便りだよ、

今世紀の！」

彼は叫んだ、

うなずきながら、

仲間に、

集まってきた、

彼のまわりに、

彼は掛けなおし、

眼鏡を、

じらすような緩慢さで、

吟味した、

それを、

仔細に。

彼は読み終えた、

彼は変化していた、

陽気な主人役から、

実際に決断する男に、

やることについて。

彼は、

直ちに打った、

呼び鈴(ベル)を、

そして言った、

足音もたてずに現れた

ムラート(白人と黒人の混血児)の

男に、

聞いて応じてきた、

「行って、

伝えてくれ、

ミスター・ウエズリーさんに、

リーヴスとモーリスそして十人ほどの

勇敢な強い男たちに来てくれるように、

会館の入り口に、

言ってくれ、
みんな武装してくるように、
持つてくるように、
たくさんのロープや鋤につける綱を。
言ってくれ、
大至急だと

そして、
彼は声に出して読んだ、
その紙を見て、
これらの言葉を。

紳士のかたへ、

お屋敷の…
そこに五人の乱暴な浮浪者がいます

空き地に道路わきの古レンガが積んである、
彼らはわたしを動けなくしている鉄砲で見えて、
それでわたしはとつたこの手段を通信の、

二人が男たちの出かけて行った
火をつけに サトウキビ畑に 屋敷の向こうにある
そして みなさんが行ったときに 消しに 火を、

そのの
全部のギャングが うばいに行く
家に カネを 支払おうとしている
だから すぐに動いてくれ
知ってるでしょう

子供が落としたこの靴下(ソック)を道路で
言ってくれ 彼女に メリークリスマスと
同じように 彼女が私に言ったと、

捕まえてくれ 怠けものたちをずっと道を行った

初めに
それから 送ってくれ 救助の人たちを
わたしを取り出しに
浸かっているところから

けいぐ 口笛ディック

内密の、
しかし、

迅速な作戦の行動があった、

ベルミード農園では、
成功を確実にする三十分の、

結果として終わった、

五人の愛想をつかさせる不機嫌な浮浪者が捕らえられ、

鍵をかけ閉じ込められた、
逃亡の恐れのないように、

屋外便所に、
到来まで、

あくる朝と審判の。

別の成果として、

来客の若い紳士たちが獲得していた、
不適當な尊敬を、

若い婦人客たちの、
その抜群の英雄的な行動について。

まだ、

ほかの成果もある、

見よ、
口笛ディックを、

英雄である、
座っている、

農園主の食卓に、
目を楽ませ、

彼の経験には決して含まれたことがなかった、
食事の世話をしてくれた、

稱賛する女性たちによって、
権化の、

上流の、

彼の類張(ほおほ)った口でも妨げられないほどの、
彼が口笛を吹くことを。

彼は語らざるを得なかった、

詳細を、
彼の冒険の、

邪悪の一回と、
ボストン・ハリリーの。

そして、
どのように彼が巧妙に書いたか、

手紙を、

包んだか、

それで石を巻いて、
配置したかを、

それを、
爪先に、

靴下の、
そして、

待った、

機会を、
投じたかを、
それを、
音も立てずに、
すばらしい遠心力の推進力で、
彗星のように、
一つに向けて、
大きな明かりのついた窓の、
食堂の。
農園主は宣言した、
この放浪者には、
もう放浪させない、
これ以上に、
彼には徳があり正直だ、
それは報いられるべきだ、
そして、
受けた恩義は、
それは返礼をしなければならない。
というのは、
もし、
彼が救済しなかったら、
疑いなく発生した大損失から、
恐らくたいへんな惨事になった？
彼は保証した、
口笛「ディック」に、
彼は考えるであろう、
自分自身に、

義務を、
名誉にかけて、
ベルミード農園の、
職位が、
適した、
彼の能力に、
見付けられるだろう、
彼に、
今すぐに、
そして、
助言した、
この進路は、
まったく円滑にいくもので、
彼が昇っていくのに、
高い地位に、
役得報酬と信認の、
この農園が供与できる。
しかし今は、
みんなが思っている、
彼は疲れているに違いない、
即座にやらなければならないことは、
休むことと眠ることだ。
女主人は言った、
召使いに、
口笛「ディック」は案内された、
一部屋へ、
翼棟の、
家の、

居住されている、
召使いたちによって、
この部屋へ、
数分すると、
運び込まれた、
持ち運びできる錫の浴槽が、
湯が一杯の、
それは置かれた、
一枚の上に、
油布の、
床に敷いた。
部屋で、
放浪者は残された、
過すように、
夜を。
明りで、
ろうそくの、
彼はよく見た、
部屋を。
ベッドは、
カバーがきちんと折り返され、
現わしていた、
雪のように白い枕と、
シーツが、
すり切れているが、
しかし清潔な赤いじゅうたんが敷かれている、

床に。

鏡台があった、

斜角の鏡がついた、

洗面台があった、

花模様の洗面器と水差しが付いていた。

二・三脚の椅子は柔らかい布張りだった。

小さなテーブルには本が置かれ、

紙ものつており、

採って一日経ったばかりの、

花房が、

バラの花の、

花瓶に挿されていた。

タオルが置かれ、

棚には、

石けんが白い皿にのっていた。

口笛ティックは、

セットした、

ろうそくを、

椅子の上に、

置いた、

彼の帽子を、

注意深く、

テーブルの下に。

満足させたあとに、

私たちは思うに違いない、

彼の好奇心を、

一連の冷めた目による吟味によって、

彼は脱いだ、

彼の上着を、

畳んだ、

置いた、

床の上に、

壁の近くの、

できるだけ遠くの、

使わなかった浴槽から。

彼の上着を枕にして、

彼は手足を伸ばした、

ゆったりと、

心ゆくまで楽しみながら、

じゅうたんの上に。

その時に、

クリスマスの朝の、

最初の筋が、

日の出の、

現われた、

沼地の上に、

口笛ティックは目を覚ました、

手を伸ばした、

本能的に、

彼の帽子に。

そして彼は思い出した、

スカートが、

幸運の女神の、

押しこめた、

彼を、

その襲のなかへ、

夜に、

前の、

そして彼は行った、

窓のところへ、

持ち上げた、

窓を、

新鮮な呼吸が、

朝の、

冷やすように、

彼の額を、

思いを凝らした、

まだ夢のような記憶に、

彼の幸運の、

彼の頭脳の中にある。

彼が立っているとき、

そこに、

恐れさせる不気味な音がつらぬいた、

恐れている谷間を、

彼の耳の。

一団が、

この農園の使用人の、

夢中になっている、

終わらせようと、

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

短縮された仕事を、
割り当てられた、
彼らに、
全員が動き始めていた。

力強いそのやかましい音は、
人食い鬼の、
労働という、
ゆさぶっていた、
大地を、

その貧しいぼろぼろになり、
永遠の変装した王子は、
求めている、
幸運を、

しがみついた、
窓枠に、
魔法の城にしながら、
おのき震えていた。

早くも、
内部から、
工場の、

とどいて来た、
響きが、
転がす、
たくさんの樽を、

砂糖の、
そして(牢獄で聞く音のような)
大きなガラガラなる音が、
鎖の、

ラバ(mules)が、
激しい奮発力を求められ、
厳しい災難のときの祈りの、
その場所で、
軛(くびき)に繋がれて。

小さな意地の悪い無音排気式機関車が、
平型貨車を何台もつなげて引き、
ところどころと煙りながら、
農園の狭軌線路の上を、

そして、
汗を流し、
働きづめの、
大声をかけている姿が、

労働者の、
ぼんやり見えた、
薄暗がりの中で、
積んでいる、
貨車に、

一週間の作業分を、
砂糖の、
ここには詩があった。

一つの叙事詩だ、
いや、

一つの悲劇、
労働の、
呪いである、
この世の、

そのテーマの。
十二月の空気は凍る寒さだった、
しかし、
汗が吹きだしていた、
口笛ブイックの顔には、

彼は突き出し、
彼の頭を、
窓から、
下を見た。

十五フィート下は、
彼の、
壁に沿って、

この家の、
彼は判断した、
花壇があつて、
その特徴から、
彼は上から張り出していると、

花壇の、
柔らかい土の、
ゆっくりと、

泥棒がやるように、
かれは這い上がった、
敷居の上に、

下げていった、
身体を、
彼がつり下がるまで、
彼の両手だけで、

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字

そして、
おり立った、
安全に。

誰もいないようだった、
こちら側には、
この家屋の。

彼は、
ひらりと身をかわし、
低く、

通り抜けた、
すばやく、
庭を通って、

低い垣根へ、
容易なことだった、
跳躍するのは、
これを、

何故なら、
あの恐怖が駆りたてたからだ、
彼を持ち上げて、

カモシカがとげの多い藪を越えるように、
ライオンが追うときに、

ピシャッと碎ける音がする、
通ると、
露に濡れた雑草を、
道ばたの、
しっかりと掴んで、
すべりやすいイグサを昇り、

草の生いしげる土手を、
歩行者の小道へ、

頂上の、
そして、
彼はなった、
自由に！

東の空が赤くなり、
明るさを増してきた。

風が、
それ自身、
流浪者の、

歩きまわる人である、
挨拶していた、
彼の兄弟分に、
頬を撫でて。

何羽かの雁が、
高い空を、
鳴いてゆく。

兎が跳ねていった、
道を、
彼の前の、
自由だ、
向かうのも、
右へ、
あるいは、
左へ、

その気分がそうさせるままに。

川はさらさらと流れ、
確かなことは誰も告げられない、
その最終的な住まいの場所を、
その水の。

一羽の小さな、
羽毛を立てた、
茶色の胸の小鳥が、
とまって、

ハナミズキの若木に、
始めた、
柔らかい、
のどの奥から出た、
優しい、

かわいい囁りで、
褒め上げた、
露を、
誘い出す、

愚かな虫たちを、
彼らの穴から、
しかし、
ぴたりと、
小鳥はやめた、
そして、

止まっていた、
その頭を横向きにして、
聞いていた。

小路から、
土手に沿っている、
わき起こっていた、
胸も躍るような口笛の音が、
明るく響く澄み切った音色のように、
ピッコロの。

楽の音はさざ波のように
トリルからアルペジオ(分散和音)になって、
歌のように、
野鳥のとは違う、
それは伸びやかな、
優美さがあり、
何かあった、
思い出された、
小さな、
茶色の鳥にも、
なじみのあるものだった、
しかし、
何でそうするかは、
小鳥にも分からなかった。
その口笛には、
彼が言っている、
あるいは啓示している、
すべての鳥が知っている、
しかし、
たいへん修正があり、
人工の、

無意味なもの、
技巧が加え修正している、
その上、
それはたいへん難しく、
奇妙なものだった。

茶色の小鳥は、
とまっていた、
小鳥の頭をかたむけて、
一方に、
その音が遠ざかって聞こえなくなるまで。

小鳥は知らなかったのだった、
その部分が、
その珍しいさえずりの、
小鳥が理解できた、
まさに、
あの演奏者に、
朝食をもたらさなかったことを。

しかし、
小鳥は知っていた、
たいへん良く、
あの部分は、
小鳥が理解しなかった、
何の関わりもないことを、
小鳥には、
だから、
小鳥はちいさな羽ばたきをさせて、
その翼に、

いきおいよく降りていった、
茶色の弾丸のように、
大きな太った虫の上に、
からだをくねらせて歩いていて、
土手の道で。

—— 終り ——

[第二十一教材] たて 三段 全文 聴語順訳 小さい字